

岐阜県下呂市における安永元年（1772 年）「下呂抜け」災害と その流出土砂の木曾川下流への影響

○名古屋大学 田中隆文

1. はじめに

河川上流の荒廃は下流の治水に影響を及ぼす。その認識は古くから指摘されてきた。熊沢蕃山の「山川は国の本なり」の言葉や、明治30年制定の砂防法の「治水上砂防ノ為施設スルモノヲ謂ヒ砂防工事ト称スルハ砂防設備ノ為ニ施行スル作業ヲ謂フ」、デレーケによる上流部水源地上における砂防工事の提案などが挙げられる。

1778年に木曾三川では「九十三年めの大水」と呼ばれる洪水被害があったが、その復旧工事の際の文書に1772年以来年々出水被害があったという記載が岐阜県治水史にある。この1772年に「飛騨益田郡内360箇所山抜け」の記載が岐阜県災異誌にある。

本報告では、1) この1772年の土砂災害の実態を調査するとともに、2) その流出土砂が数年にわたる下流の水害発生に影響したのかどうかを検討した。

2. 方法

資料を探索し分析を進めた。資料は岐阜県治水史、岐阜県災異誌のほか、下呂町誌、下呂市史、下呂市地域防災計画資料編、岐阜県林業史、近世濃飛林業史、濃飛河川資料、などを用いた。1) については下呂町市内の黒戸川の上流部から飛騨川合流点まで徒歩による踏査を2020年11月11日に実施した。

3. 結果

3. 1. 文献資料調査の結果

3. 1. 1. 安永期の木曾三川の水害と復旧工事

岐阜県治水史上巻に以下の記載がある。

・「安永7年7月11日 洪水があり、・・・これを「九十三年めの大水」という。幕府では復旧工事目論見 翌8年因州鳥取藩お手伝いを命ずる。」(p. 798)

・図面交付 同図に依れば、東は可児郡伏見村、西は不破郡今須村、南は伊勢長島に至る広範囲に渉り、木曾川伊尾川長良川および支派川沿岸の大規模な普請である」

(p. 800) ・「しかして同普請は安永元年以来年々出水被害があったので幕府村々を検分目論見したもので、」

(p. 805)

3. 1. 2. 安永元年の土砂災害

安永元年の災害について岐阜県災異誌に以下の記載があるが、大日本地震史料には、当該の記載はない。

・「安永元年6月20日（1772年7月20日）地震 飛騨益田郡内360ヵ所山抜け（大日本地震史料）」

飛騨下呂 通史・民俗（下呂市史）に以下の記載があり、夢物語—飛州大原騒動回想録（1974年）（続飛騨叢書〈1〉）国立国会図書館内/図書館送信で確認できた。下呂町誌および下呂市地域防災計画にも同様の記載がある。

・「明和9（安永元）1772年に『下呂抜け』と称する出水による山崩で大被害を受けた。六月廿日暮方より夕立雨しきりに降り、國中川々出水、別して益田郡所々ぬけ、宮田・羽根・西上田・少ヶ野、三原・森・小川・この村々にて民家田畑つき埋め、あるいは大川へ押し出し、横死の者おびたしく、これまた希代の大変なりと『夢物語』（大野政雄校訂本）に記され、山抜け場所二六〇ヶ所に及ぶ災害であった。」(P. 208) 近世濃飛林業史には以下の記載があった。「安永元年6月20日「集中豪雨。益田川筋山抜け、川欠多し。（田中貢太郎「飛騨国大野郡史P. 503」）」

濃飛河川資料には下呂抜けについて詳細な地名の記載があった。「濃飛河川資料Ⅰ（p. 53）「明和九壬辰年六月廿二日廿三日洪水「益田川（木曾川支流飛騨川上流）通飛騨国三郷村ノ内森組字笹平山崩レ黒戸谷ヨリ砂石押出巨害ヲ被ル此夏七十五日ノ間霖雨アリ為メニ此辺ノ地ニテ山崩レハ八百八ヶ所アリシト云」

3. 1. 3. 土砂災害と洪水発生に関連づける資料

下呂抜けは飛騨川本川まで達していたのかどうか、達していた場合は飛騨川の流れに影響があったのか、については本報告で参照した資料には記載はなかった。江戸時代の下呂温泉は源泉が、黒戸川の合流部より上流の飛騨川河床にあり、それが土砂で埋まるという災害が、文政8（1825年）と天保8年（1837年）に記録されている。安永元年の災害による源泉への被害は参照した資料にはなかった。

飛騨川本川の運材や舟運が、流出土砂による影響を受けたのかどうかについては、以下の理由ではっきりしない。

・明和9（安永元）1772年は、前年の明和8年に飛騨全土に元伐休山命令が出され、そもそも運材のニーズがない。

・天保9～13年（1838～1842年）の江戸城西丸再建用材のうち板材は、牛で上有地まで運び小舟で白鳥湊へ。上々正目材は牛に載せて利根川まで陸送し、船で江戸へ運ばれた（岐阜県林業史上巻 p. 152）

3. 2. 現地調査の結果

濃飛河川資料Ⅰ（p. 53）「明和九壬辰年六月廿二日廿三日洪水 益田川（飛騨川上流）通飛騨国三郷村ノ内森組字笹平山崩レ黒戸谷ヨリ砂石押出巨害ヲ被ル此夏七十五日ノ間霖雨アリ為メニ此辺ノ地ニテ山崩レハ八百八ヶ所アリシト云」と具体的な地名の記載を手掛かりに、黒戸川の現地調査を実施した（写真、1，2，3）。

市街地を流れる黒戸川の両岸の小高い地形は、図1の赤丸の中心付近で不明瞭となることを現地踏査で確認し、図2の縦断面図においても赤丸の中心付近が肩のような地形となっている。もし、この位置で黒戸川の流出土砂の一部分が停止した可能性もある。現地を踏査した結果、市街地の

中でも黒戸川沿いに微高地が観察されたが（図3），これが1772年の被災地と一致するかどうか，絵図面あるいは文献などを，岐阜県図書館に問い合わせたが，資料は無いという回答を頂いた。黒戸川に沿岸に泰心寺があり（写真

1）、町史や市史に移転の履歴がなく，おそらく災害当時からその地にあったと思われる。このお寺が被災したかどうか，お寺に尋ねたがわからないという回答であった。

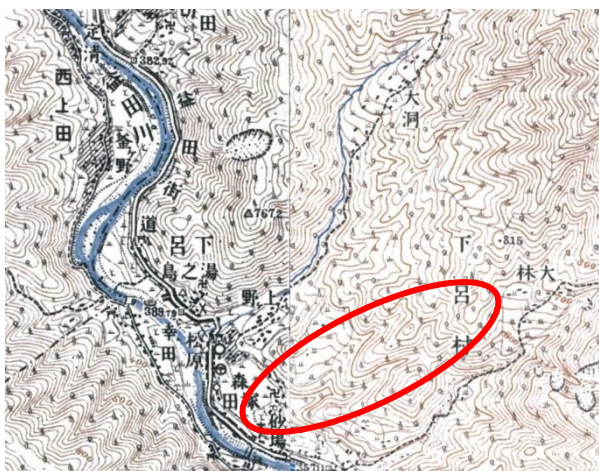


図1 木曾川水系飛騨川左支黒戸川の位置



写真1 黒戸川(写真手前)の右岸に位置する泰心寺

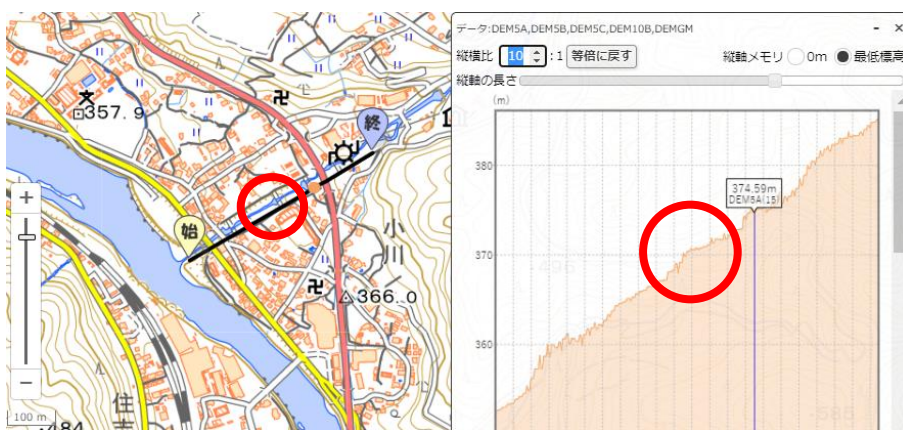


図2 下呂市市街地付近における黒戸川の縦断面図

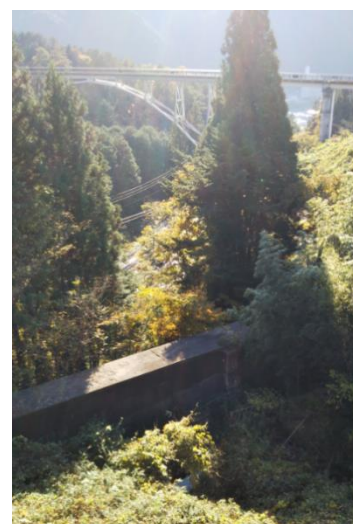


写真2 黒戸川の中流部にある砂防堰堤



図3 下呂市市街地付近における黒戸川の横断面図



写真3 下呂市市街地を流れる黒戸川